

令和8年度 第1回高知県教育振興基本計画推進会議質疑・応答、意見交換の概要

日時：令和8年5月26日（火）13:30～15:30

場所：高知共済会館3階「桜」

【次第】

- 1 令和7年度施策に関する点検・評価について
- 2 第4期高知県教育振興基本計画（第2次改訂）に基づく取組について

■ 1.（1）令和7年度施策に関する点検・評価について

（岡谷議長）

それではここから、進行を私の方で務めさせていただきます。

計画の進捗状況について忌憚のないご意見をいただき、また計画の見直し等を効率的・着実に進めるためにどうしていったらよいかということについて、ご発言をいただければと思う。

資料等については事前にお送りさせていただいているので、それぞれのご専門の立場からご意見をいただければと思う。

ただ、時間が限られているため、本日は、「学力向上」「キャリア教育」「いじめ・不登校への重層的な支援」について、各15分から20分ずつぐらいご意見を賜り、そのあとで「幼児教育」「運動面」などといったことについて、ご意見をいただければと思っている。

それでは次第に従って進行させていただきたいと思う。

本日の議事は（1）と（2）があり、（1）は「令和7年度の施策に関する点検・評価について」、（2）は「第4期の高知県教育振興基本計画（第2次改訂）に基づく取組について」ということになっている。

それでは、（1）から事務局からご説明をお願いする。

（三木教育政策課長）

まず議事の1つ目、「令和7年度施策に関する点検・評価について」である。例年のことではあるが、この点検・評価については、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」、いわゆる都道府県教育委員会等がよるべき「地教行法」に基づいて行うこととなっているものである。

この法令においては、各教育委員会が毎年、その権限に属する事務の管理執行の状況について、点検・評価を行って、これを議会に報告するということになっている。

その際、「教育に関し学識経験を有する者の知見を活用する」ということが、法令上義務づけられていらうため、本日の会議はそこで言うところの「学識経験を有する皆様から、ぜひご意見いただいて」ということを趣旨とするものである。

本県においては、この点検・評価について、教育振興基本計画に定める、様々な施策の効果を測定するために、指標を設定しており、これに照らして行うということにしている。お手元のタブレットの資料1と2という形でお配りしているものが、事務局として点検・評価を行った結果をまとめたものである。

資料2が非常に大部にわたるために、簡潔にまとめた資料1に基づき、まずはご説明をさせていただきたいと思う。

本県の教育振興基本計画においては、施策体系をまとめた上で、この資料の右上にあるように、全部で合計107個の指標を設定して、それぞれの施策の進捗・効果を測定している。

今年度4月末までに、様々な調査を行い判明した結果を用いて、この測定結果を整理したものが、ご覧の表のとおりの結果である。

A評価、すなわち「計画に定める年度の目標を達成した」というものが48個あり、これが全体の約45パーセント。次のB評価だが、これは「計画に定めた目標にはこれ達しなかったけれど、その計画のスタート時点で定めた地点よりは改善が図られている」というもので、これが25個で全体の約23パーセント。C評価は、「目標にも達しなかったし、かつ、スタート時点よりもちょっと後退してしまった」というもので、25個あり、これも同じく全体の23パーセントになっているということが全体の評価である。

これら107個を資料2に記載し、主な指標として掲げているのが、この表中の「主な指標」というところである。それぞれを説明申し上げると、例えば評価をしているうちの1つ目にある「学級の友達との間で話し合う活動を通じて自分の考えを深めたり新たな考え方に気づいたりすることができている」は、全国学力・学習状況調査の児童生徒への質問で聞かれている調査である。これに肯定的に回答した児童生徒の割合については目標を達成している状況であり、こういった目標達成の理由・要因を分析すると、やはりここには授業のデジタル化の進展が大きく影響しているだろうと考えている。県として実施している「令和の授業DX」事業があるが、この中で好事例の発信等に取り組んできており、そういったものを通じて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践というのが進展していると評価している。

A評価の3つ目にある「『今住んでいる地域の行事に参加している』と回答した児童生徒の割合」について、①が小学校で、②が中学校になるが、中学校の方をご覧いただくと、目標値を大幅に上回っているのがご覧いただけると思う。これについては本県の「目指す人間像」として掲げている中にもある「地域への愛着と誇りを持つ子どもたちを育てる」という観点から、学校と地域社会が連携・協働する体制づくり等が、ある程度なされてきた成果なのかなと受けとめている。

一方、B評価では、例えば「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め、整理して調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」については、これも同じく全国調査の結果である。中学生は、スタート時点の基準値としている令和5年度よりは改善が見られているが、目標には達していない状況である。目標を達成できなかった要因分析をしてみると、本県においては、総合的な学習の時間に効果的な授業が展開できるように、教職員の研修等に取り組んでおるところではあるが、必ずしも参加者それぞれが自分たちの学校で活用できるような授業の進め方というものを会得しきれなかった部分があるのかなと認識しており、反省点であると捉えている。

C評価では、「学校の授業時間以外で、平日全く勉強しないと答えた児童生徒の割合」ということで、これは少なければ少ないほどいいというものだが、目標値よりも少し多い状態が続いている。

このあと説明する教育振興基本計画の年次改訂にも関わってくるが、このことは少し重大な課題であると捉えており、我々としても子どもたちの自律的な学習習慣を確立するために、1人1台端末を活用した、自分で苦手分野を克服するための学習に取り組む学び方、勉強の仕方を子どもたちに身につけてもらうとともに、例えばPTAとも連携をしながら、家庭学習の習慣化の促進を図っていきたいと考えている。

このように指標ごとに状況とその要因を分析し、課題を解消するための施策を新たに打っていくということで、本県教育の水準向上を図り、子どもたちが自分たちの将来の舵取りをする力を育むための基盤を整備していくことを目指している。

指標については以上であるが、前回、昨年 11 月の会議から更新した内容があるので、ご紹介をさせていただく。資料 2 に、107 個の指標とは別に、子どもたちの状況を全体的・総合的に捉えるために、いわゆる知・徳・体の 3 要素を踏まえて、測定指標を定めて、モニタリングを行っているものがあるので、こちらについてもご紹介をさせていただきたい。

資料 2 の 6 ページからご覧いただければと思うが、まず、知・徳・体の 3 つのうちの 1 つ目、学力に関してである。

これは昨年のおきにも申し上げたが、改めて申し上げますと、全国学力・学習状況調査の結果を用いて測定しているものであり、小学校においては、全教科で全国平均を上回る状況にある一方で、中学校については、国語、数学ともに全国平均を下回っている状況になっており、特に数学については、前年度よりも下降しているという状況である。これは令和 7 年度の調査結果であり、今年度の全国学力調査については 4 月の終わりに実施をし、夏頃の結果発表を待つ状態にあるというところである。

7 ページは、高校の学力に関する測定指標の状況である。左上の帯グラフにあるが、ここで実施している学力検査で区分を設定しており、S・A・B・C・D とあるが、C 層以上の学力というのは、「基本的な問題に取り組むのに必要な知識が身についている」とされるものである。一方で、D 層、特に D3 層というものは、義務教育段階の学び直しが必要とされる段階である。D3 層の割合は、増加していることがご覧いただけると思うが、二極化というか、学力に課題のある生徒へのケアが必要な状況にあると捉えているところである。

続いて体力だが、8 ページに全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果を示している。真ん中の青い棒のグラフが令和 7 年度の調査結果で、小学校の女子以外は、全国平均並み、またはそれ以下という結果になっている。これまで全国平均を上回る結果が続いていたので、少し残念な結果になっているが、こういった状況を踏まえて、子どもたちの体力・運動能力の向上についても、取組が必要であると捉えている。

11 ページの下の方には、いじめ、暴力行為に関する測定指標を示している。こちらは左側にいじめの解消率を示しており、全国平均を上回る状況である。相対的に全国よりも良好な状況にはあると捉えている。

続いて 12 ページをご覧いただきたい。こちらは不登校の状況を示したもので、これは国の最新の調査結果である。本県の全児童生徒 1,000 人当たりの新規の不登校児童生徒の数については、小中高いずれの校種でも、全国平均を下回る結果となっている。さらに言うと、不登校の児童生徒が学校内・外の専門機関できちんと相談指導を受けている、つまり、孤立していないという状況についても、全国平均を上回る状況が続いており、こういった状況については、不断的努力を続けながら、継続してさらに改善を目指していく必要があると捉えている。

以上、本県の子どもたちの状況等について、指標の点検・評価としてご説明を申し上げた。

(岡谷議長)

続いて「第 2 次改訂に基づく取組について」のご説明を続けていただきたいと思いますとも思うが、私から 1 点質問したい。

C 評価は、経年で少なくなっているのか、それとも増えているのか、数はわかるか。A 評価、B 評価

合わせて大体 70 パーセントぐらいで、よくやっていただき、本当に頭が下がる思いなのだが、未到達のものが、少なくなっているのか、増えているのか、そのあたりは、点検されているかどうかをお聞かせいただきたい。

資料 2 だが、先ほどご説明いただいたものの部分とは違うが、28 ページなどを見ていただくと、「地域や日本の伝統・歴史・文化等の教育の促進」ということで、②のところの『日本やあなたが住んでいる地域のことについて外国の人にもっと知ってもらいたいと思う』と回答した児童の割合を 87%、中学校 75%とする』について、それには到達してない。84%と 71%なので、これは B 評価でもいいんじゃないかなと思うが、問題はそこの指標のところにある分析である。「日本のことを外国人に知ってもらうためのパーセンテージが少ないので、道徳教育パワーアップ研究協議会において学校と地域、連携協働する体制づくり等について協議を行う」というのは、それが問題なのではなく、もっと英語教育とか、それをいかに活用するかっていう方が問題なのではと思う。そのあたりの C 評価を減らすための分析はうまくできているのかどうかというところは、どのように確認しているのか少しお聞かせいただければと思う。

(三木教育政策課長)

「C が減ってきているかどうか」だが、令和 6 年度のこの分類では、B が 19 個で、C が 23 個、今年度の評価を見ますと、C が 25 でございます。令和 6 年度は 23 個、令和 7 年度 25 個ということで、数字だけ見ると増えているという状況ではある。年々の状況によって、波があるため、必ずしも一貫して減少傾向にはない現状である。

(岡谷議長)

数字がどうこう言っているのではないのだが、減らしていくためにどう分析して、どう取り組んでいくかということがきちんと進捗管理できているのか、今ひとつ具体性に欠けている部分がある。

「研修の中身をどうすればいいのか」というところまで突っ込んで分析していると思うが、これには表れていないので、それをしていただければありがたいと思っている。

続いて議題(2)「第 4 期高知県教育基本計画(第 2 次改訂)に基づく取組について」事務局より説明をお願いします。

■ 2. 第 4 期高知県教育振興基本計画(第 2 次改訂)に基づく取組について

(三木教育政策課長)

この基本計画については、冒頭の教育長からの挨拶にもあったように、本県の教育の羅針盤として、令和 6 年度に策定をし、計画期間は 4 年間で、令和 8 年度は 3 年目に当たるということで、折り返しを迎えたという状況である。

本県では、毎年改訂をしているが、先ほどご説明申し上げたような現状、実態ということを捉まえて改訂していくことと、社会情勢等を総合的に検討を重ね、本県の教育の中で重点的に取り組むべきと考える施策を取り入れていくということが、毎年の年次改訂のポイントである。

この改訂においては、資料 3 の方に示しているとおり、昨年度、この教育振興基本計画推進会議の中で、皆様から頂いたご意見についても、大いに反映をさせていただいた。

資料４の１ページ目に、具体的な改訂のポイントとして５本の柱を掲げているが、改めてご説明申し上げますと、「学力向上・定着の取組強化」、「地域への理解と愛着を育むキャリア教育の推進」、「重層的な支援体制の整備強化によるいじめ防止・不登校対策の推進」、それから「高等学校の魅力化・特色化」、「教職員の働きやすさと働きがいの向上」という５本を今年度の年次改訂の柱にしている。

資料４の２ページ目をでお示ししているのは、柱の１つ目「学力向上・定着」である。左側に小・中学校、右側に高校をお示ししており、先ほど指標に関するご説明の中で触れたような課題が現状あるというところを分析した上で、学力の定着には反復した学習の継続が不可欠であり、「授業外学習の時間が、全国に比較したときに、圧倒的に少ない部分がある」というところを大きな課題として捉えている。

こうしたことを踏まえ、下の段「２．課題」にございますように、改訂の方向性として意識したものは、先ほど申しあげた「デジタルツールを活用して、子どもたちが自律的に学べる基礎づくりをしていくということ」や「家庭での学習習慣、生活習慣の確立を図っていくこと」が大きなポイントになってくるということで、検討の中に盛り込んだ。この点で、特にデジタルツールの活用に関しては、昨年のこの会議においても、生成ＡＩの利活用を含めてご議論いただいたと認識をしている。

右側の高校の方をご覧いただくと、先ほども申し上げた、いわゆる学力がＤ３層に当たる生徒については、高校入学の指導によって改善してきてはいるものの、依然として一定の数が見られている。基礎的・基本的な学力がまだ十分身につけていないが、高校に進学し、その段階から学習に取り組まなければいけないという状況にある子どもが依然といるという状況を前提として、「子どもたちの自発的な学びを促す仕組みを作っていくこと」や「各学校、あるいは教員が、指導方法の研究を重ねて、授業改善を加速していくこと」が不可欠であるということ課題として捉まえている。

次のページに、先ほど申し上げた課題意識を踏まえ、具体的な取組を掲げている。

小・中学校については、「デジタル技術を活用した個別最適な学習の充実」が、全体を通定するものになっているが、あえて申し上げれば、デジタル技術を効果的に用いること自体がゴールでは当然なく、その中で重要なことは子どもたち一人一人の苦手さやつまづき、課題、そういったものを正確に捉えて、個々に応じた指導を実現していくことが重要であろうということで、それを実現するために、こういった施策を展開していきたいというものである。こういった考えについては、この後、発表をいただく、原委員のお話にも通じるところがあると捉えている。

それから、先ほど申し上げた家庭での学習習慣を確立するために、家庭への情報発信・啓発を図るなどのことについても、継続的に取り組んでいきたいということを計画の改訂のポイントとして示しているところである。

右側の高校段階については、先ほども申し上げた学力に課題がある生徒を支えていく必要があり、そもそも机に向かうということ自体に困難がある子どもたちに寄り添っていく必要があるということから、エンカレッジティーチャーという新しい学習アドバイザーを設けて、今年１４校に配置して、子どもたちの学びを後押ししていくということや、それぞれの学校の授業改善ということで、これまでやってきたが、「授業デザインプロジェクトチーム」によって、各校の授業改善の取組をさらに加速化していくということを改訂のポイントとしている。

次のページはキャリア教育である。このテーマに関しても、昨年の会議の中で、非常に活発にご議論をいただいたところである。特に本県では「地域への理解と愛着を育むキャリア教育」とあえて言っているが、昨年度からかなり重点的に取組を進めてきた。この経験も踏まえ、資料の下の方に課題をいくつかまとめている。

1つ目は、進学や就職といった進路の場面を具体的に想定して、子どもたちがそれぞれ将来を描くために必要な情報を的確に提供していく必要があるということ。

2つ目は、子ども自身に知ってもらおうということのみならず、子どもの進路選択には、教員や保護者が大きな影響力を持つため、そういったところへのアプローチが必要であるということ。

3つ目に、小・中・高の発達段階それぞれに応じて、様々な教育資源と考えられる本県の魅力的な、伝統文化、魅力的な産業などを生かしながら、子どもたちにそういったものを教えていくということが重要であろうと考えている。

5ページに、先ほど申し上げた3つのポイントを踏まえて、具体的な取組を整理している。例えば県内の大学や企業との密接な連携をさらに強化していくことや、保護者に対しても、例えばUターンをしてきた方も含めて、本県において活躍している方や人材がいるということ、モデルとして知ってもらう取組を進めていくことにしている。それから、子どもの進路指導に当たる先生方にも県の産業企業を知ってもらうためのツアーなどを計画・企画しているところである。

6ページからは、いじめ・不登校対策である。測定指標の中でもご説明申し上げたが、本県における不登校児童生徒の割合は、全国平均を下回っている状況ではあるが、数自体は増加傾向である。

こういった状況を捉まえて、6ページの中ほどの「令和7年度に実施した取組」というところを取り組んで参ったが、子どもたちが、どういう状況にあっても、学びから取りこぼされることがないように、重層的な支援を講じる必要があるということで、さらに取組を充実していくことを改訂のポイントにしている。

具体的には7ページにいくつかお示ししているが、まず子どもたちが困難に陥りそうなときには、自らSOSを出せるように、あるいは子どもたちが出したSOSを周りの友達がしっかりと受け止めて、必要な支援が講じられるようなモデルの構築をしていきたいと考えている。それから、教員だけに関わるのではなくて、専門職をはじめとして、様々な専門人材、専門機関と連携を図りながら、様々な大人が子どもたちを取り巻いて支えていくことを、形として作っていききたいということを1つの柱にしている。

一番下の方になるが、今年度高知市といの町で「学びの多様化学校」が開設された。私どもも、この中に、心理・福祉を両方丸ごとサポートできる専門職を配置するなど、人的な面で支援をしている。こういった様々な子どもたちのSOSから、あるいは、少し困難が出てきたというときには様々な大人が支える、あるいは場として、通常の学校だけではなくて、様々な機関を通じて子どもたちを支えるという、まさに重層的な支援を進めていくということを、この改訂の柱にしているところである。

本日、特にご議論いただきたいテーマとしては、以上申し上げました3点、「学力の向上・定着に関すること」、「キャリア教育に関すること」、「いじめ不登校対策に関すること」だが、国全体の大きな動きでもある「高校改革に関すること」についても、教員が、働きやすく、働きがいを持って子どもたちに向き合える環境を整備していくことなどについても、昨年度のこの会議の議論も踏まえまして、改訂の柱としていることを、あわせて申し添えさせていただく。

どうぞよろしくお願いする。

(岡谷議長)

資料4に基づいてご議論いただくが、それに関わって、原委員から「梶原町の子どもたちの学力向上に向けて」という取組について、ご紹介をお願いします。

(原委員)

短い時間ではあるが、梶原町で昨年度から取り組んできた、M I Mと書いて「ミム」と言うのだが、この取組について発表させていただく。

M I Mというのは「マルチレイヤー・インストラクション・モデル (Multilayer Instruction Model)」ということで、「多層指導モデル」の略語である。

私は、特別支援学校で教員として働いていたときに、教育相談で、通常学級にいる学習面や行動面で課題があるといわれる子どもたちが、「力があるのに、十分発揮できていない」、「一斉授業の中で取り組める支援があったら、つまり前に子どもたちが理解できることが増えるのではないか」、「そういうわかる授業がやっぱり学力の底上げに繋がるのではないか」など、そういうことを考えているときにこのM I Mを知った。

M I Mを実際に梶原の方で取り組み、気づいたことをこの場で共有させていただき、高知県の子どものための支援のツールとなれればと考えている。

3 ページをご覧いただきたい。多層指導モデルM I Mの概要だが、M I Mは読みに特化したプログラムである。マルチレイヤーということで、それぞれの段階に合った指導を行うために、早期に発達段階を発見して、個々の子どもに合った指導をしていくことになる。これまでは、ついていけない子どもを見つけてから教育相談等に関わり、その後支援を始めるということが、普通だったと思うのだが、このM I Mは、先につまずきそうなことを早い段階で見つけることができる予防的なプログラムであり、そこがいいところだと思っている。

4 ページをご覧いただきたい。子どもたちが毎月1回行うプリントの成績で1 s t ステージ、2 n d ステージ、3 r d ステージに分けるのだが、1 s t ステージは、先生が通常の授業の中で伝えることでわかる子ども、2 n d ステージは、それだけではちょっとなかなか難しく、補足的な指導が必要な子ども、3 r d ステージは、個別の指導が必要な子ども、というふうに分けていく。

実際に私がアセスメントとして毎月1回行っているプリントが次の5・6 ページである。5 ページをご覧いただきたい。絵を見て3つの言葉から正しい言葉を選ぶものである。紛らわしい言葉が3つ出てきて、その中から、自分が覚えているひらがなの文字と見た絵を合わせる問題で、清音、濁音、促音、拗音、拗長音、カタカナに分かれており、採点の際に何が弱いのか、とてもわかりやすくなっている。頭で思っている音と視覚から入ってくる文字とのマッチングができていないと、素早く文字を見て選べないため、文字と頭の中の音がくっついてない子どもは、点数が取りにくい。

6 ページの2枚目は、3つの言葉探しとなっていて、語彙を多く獲得できていれば、多くの言葉を見つけることができる。これを1分間で行うのだが、言葉を知らない子どもはすごく悩み点数が伸びない。今年度の4月に梶原町では、高知大の松本先生に来ていただき、全教職員にM I Mの研修を行ったのだが、実際にやってもらうと、先生たちもなかなか点が取れず、「思ったより難しいね」とおっしゃっていた。このプリントを毎月1回行い、データを取った。

7 ページご覧いただきたい。梶原町では、昨年度からM I Mに取り組んでいるが、それは読みがすべての学習の土台となると考えているからだ。M I Mは、読みに対してのつまずきを毎月実施するプリントで発見し、授業中に特殊音節などのつまずきを解消していくものである。

M I Mは指導パッケージとして販売されている。プリントや教材データの処理がディスクの中に入って2万円ぐらいであり、あまりお金もかからず効果的なのではないかと思っている。

また、M I Mは東京書籍の1年生の国語の教科書にも問題が掲載されており、しっかりとした裏付

けもあるのかなと思っている。1年生の6月末にはひらがなの指導を終えるところがほとんどだと思うが、その時に特殊音節の習得が難しいという子どもが一定いると言われている。「分からない」と言える子どもはいいが、「分からない」と言えず、読み書きが苦手な子どもを取りこぼさずにサポートするためには、MIMがすごく役に立つと思っている。

8ページをご覧いただきたい。梶原町の子どもたちの学力は、全国平均や高知の平均を見たときに、それほど低いわけではないが、学年によって差があると感じることが多い。問題を理解するためには読解力を身につけることが必要だと思っている。教科書やテストの問題が読めることで、学習全般の効果が期待でき、学力の底上げに繋がっていくと考えている。

昨年度のMIMの実践として、9ページをご覧いただきたい。私は、昨年度の4月から梶原町で勤務し、わからないこともありながら始めたが、通常級にいる「グレーゾーン」と言われている、学習に課題がある子どもたちに力をつけるために、MIMが効果的な取組であるということで、様々な研修に行かせていただいた。また、高知県では、高知大学の松本教授がMIMの研究を行っているということで、松本先生にも助言をいただきながら実践を行ってきた。対象は小学校1、2年生。先ほど示したプリントを毎月実施していくことと、「読み名人」という形で授業を行い、特殊音節を身につけるための言葉遊びのようなことをやってきた。

特殊音節は、かな文字のように、音が一対一で対応していない。小さい「っ」の促音というのは、文字として、小さい「っ」と書くが、発音はしない。小さい「ゃ」とか「ょ」の拗音も、「きゃ」と、2文字で表すのが、音は1音。この特殊音節が、つまずきやすいと言われており、3・4年生でも、「っ」が抜けていたり、「きゅうしょく」が「きょうしょく」になっていたり、誤りを見たことがあるのではないと思う。こういうことは、従来はあまり重要視されてこなかったが、これを低学年のうちから、確実に繰り返し教えていくことが、MIMの特徴だと思っている。具体的には単に覚えるのではなく、視覚化、動作化を通じて身につけていく。特殊音節は、音の問題で、音は消え、見えないため、見える化・視覚化していく。清音で1つの音には丸「○」、「っ」には小さい丸「◦」、「ちゃ」などの拗音は二重丸「◎」と記号化し、そして、次は動作化していく。例えば猫の絵を見せ、「猫は、パンパンと2音だよ。」と。小さい「っ」が入る根っこでは、「ね」「っ」「こ」となり、小さい「っ」はゲーで表すのだが、「パン・ゲー・パンで根っこだよ。」というように、子どもたちには音と動作化と視覚化で説明をし、言葉と手の動きを合わせて唱えることで、特殊音節に慣れ、音のメカニズムについて理解していくというような流れになっている。クイズみたいな形で楽しみ、嫌がらずに子どもたちが楽しくやれていることがとても大事だと思っている。

11ページのグラフをいただきたい。1年生のグラフであるが、9月の開始で短い期間だったが、3月にはほとんどの子どもが点数も上がり、力がついた。1年生は早くするっていうのが難しく、1分間のため、力があってもものんびりやると点数が取れないし、語彙も少ない年齢・学年でもあるし、3つの言葉探しのプリントの2枚目では、みんな苦戦していた。12月から点数が上がってきているが、この時期は低学年団がMIM週間という取組を実施した時期で、宿題や隙間時間のプリント、国語の時間など、子どもたちが言葉のプリントをたくさんする機会が増えた。MIMは、取り組んだ時間が多ければ点数が伸び、子どもたちから「自信を持ってできてきた」や「楽しい」という感想が増えてきた。

13ページの2年生のグラフをご覧いただきたい。この学年は、1stステージの上の子どもと3rdステージの下の子どもたちの間の差がすごく大きくて、中には点数が伸びていない子どももいる。この結果からは、認知的な課題の可能性を少し考えていかななくてはいけないと思っている。言葉の意

識は、2年生の方がとても高く、1年間でたくさん言葉を知ることができて、一生懸命やろうとしているというのが、私の実感である。

MIMは毎月のプリントを実施するだけでは、力につかない。子どもの実態を把握し、授業や宿題、好きな時間や個別の指導等のステージに合った支援を行うことで、子どもたちができることが増えていくというのを実感している。

15ページをご覧いただきたい。2ndステージや3rdステージの子どもへの声掛けや、個別指導を繰り返すということが、とても大事な指導だと思っている。梶原の子どもたちは、全国平均から比べると3rdステージの子どもが割と多かったが、回数を重ねることでできるようになってきた。やはり嫌がらずに、楽しみながらできるということが、すごく大事だと思う。第3週がMIM週で、プリントや宿題のほか、自習で自分からどんどんやっていけるようにしてきたし、担任の先生と毎月1回、MIMのアセスメント後に、「この子がこれだけ伸びたよ。」や「この子はあまり伸びなかったけど、他の教科でどうだった？」などの話をしながら、子どもの実態と変化についての確認もしてきた。また、高知大の松本教授にデータも見ていただきながら、取組についての助言も頂きながら進めてきた。今年度も継続してMIMに取り組んでいるが、教育委員会や学校現場とも共有しながら、子どもたちの学力向上に向けて「読み」ということに特化しながらやっていきたいと思っている。

最後になるが、高知県のMIMの実践状況である。高知大の松本先生からいただいた資料だが、52校行ったそうである。17ページでは、昨年度松本先生が行って、実際に研修したり、MIMの授業を行ったりしたということで、梶原の梶原小学校も入っているが、このくらいの学校がMIMに取り組んでいるという状況である。18ページだが、2年生でMIMに取り組んだ子どもとそうでないクラスでは差が出ている。高得点だった子どもは、5年生の国語の成績も高得点というデータでも出ており、有効だということがわかると思う。

全国でも横浜市や栃木県の鹿沼市では、全ての小学校でMIMを教材として取り扱っており、学校にMIM担当の先生を置いて取り組んでいると聞いている。

私は、MIMに取り組むことによってどの段階の子どももしっかりと力がついていくと実践する中で感じている。最後のまとめになるが、MIMは誰1人取り残さない教育の土台だと思っている。読みの力は、自信と意欲につながり、すべての学習の基礎力になると思っている。学校と梶原町教育委員会の連携により支援体制を継続し、梶原の子どもから読みに対する苦手感がなくなり、学力的な底上げを目指していきたいと思っている。

(岡谷議長)

原委員への質問等も含め、学力向上、とりわけ資料4の2、3ページ辺りのことについて、意見のある委員はいらっしゃるか。

(川田委員)

興味深い資料で、話を聞くのをとても楽しみにしていた。

2点ほど。まず、資料1のC評価、全く勉強しない、自主学習とか家庭学習とかをほとんどしない子どもに子どもたちのC評価の件だが、質問の仕方が子どもにとってどうなのか、ということがあると思う。例えば、小学校の低学年、石の好きな子は、学校から帰っても石をどんどん集めてみるとか、昆虫が好きな子はずっと昆虫を見る、魚釣りの好きな子はずっと魚釣りをする。それというのは、子

どもは興味があるものをやり、そのことを言語化していくと学びにすべてつながっていく。プリントをやっているかとか、算数や国語の問題を子どもが勉強しているか、家庭学習をしているか、という質問であれば、「していない」と答えると思う。そのあたりの質問の仕方に少し興味があった。

もう1点。授業外学習というのは、もちろん学校での学びがすべてではなくて、例えば言葉であったり先生との触れ合いであったり、土を延々掘り返す、グラウンドの小石を拾うというのもすごい学びだと思う。いずれその子どもが大きくなり、「社会に出てどんな仕事に就いてみたいの？」って聞いたときに、石を拾う仕事っていうのも、その子どもにとったら素晴らしい仕事だと思う。そこで、「算数や国語の勉強ができなかったらそれにもなれないよ。」という大人の声かけによっては、その子の未来を切ってしまうと思う。その授業外学習こそ、子どもにとって一番大事で、学校でやっていることがすべての学びではないということも、必要じゃないかなと思う。キャリア教育というのは、幼稚園、保育園の段階から始まっていると思う。将来自分がどんな大人になりたいか、どういう暮らしをしていきたいか、もちろん、お父さんとお母さんが身近な存在のため、そういう大人になりたいっていうのもあると思う。身近な保育士や幼稚園の先生、ピアノの先生とか自分がサッカー教室に通っていたらサッカー教室の先生、そういう大人がどういう声かけをするかによって、ずいぶん変わってくると思う。

でも、そういう大人は、今までそういう学びをしてきていないので、この基本計画とはややずれるかもしれないが、これから社会に出て、AIがすべてではない時代を、その子どもたちが作っていかないといけないと思う。私たちが面倒を見てもらわなければならない子どもたちが、MIMによる言葉がベースにあるというのがすごく大切だと思う。それがキャリア教育にもつながっていくというふうに考えてはどうか。

資料2のD1、D2、D3の学力に課題がある生徒たちだが、彼らにも、MIMの学習は大切だと思う。問題の意味が理解できず、どう答えていいかわからなくなり、学力がついていかなくなる。だが、言葉にはできないものを持っている学生や子どもたちはいて、それをどう表現していったらいいのかわからないのであれば、例えばMIMを使って、小学生でも中学生でも高校生でもやり直して学習することができると思う。それを提供できるのが、教育ではないかなと思う。学力に課題がある学生さんを生み出してきたのは、私たち大人かなと思う。でも、いずれその彼らには社会を支えていてもらわなければならないので、教育委員会の皆様お知恵を貸していただいて、何か未来の子どもたちへつないでいただけたらというふうに思う。

(原委員)

高校生は聞いたことはないが、中学校でMIMをやっているところはある。

小学校の低学年の子どもたちにも点数に幅がある。中学校で行う場合も同じ問題を実施するのだが問題は全部で60問、最高は60点だが、十数点しか取れない生徒もいるというデータを見せてもらったことはある。

(岡谷議長)

最初の質問についてはいかがか。授業外学習もプリントをやるだけではなく、もっと学習していることを積極的に評価してはどうかということだが。

(三木教育政策課長)

川田委員の問題意識に正確に答えられるかどうか、やや自信がなくて申し訳ないが、おっしゃっていただいたことは、今、次期学習指導要領の改訂について国でも議論されている中で、柱がいくつかあるが、「好きを育て、得意を伸ばしていく」ということが大きな柱として言われている。

子どもたちの探究心、探求的に自分の好きなもの、関心のあるもの、興味のあるものを突き詰めていくという活動と、評価の学習というのが、いかにリンクしていくかというところを突き詰めるべきであるというところで、ちょっとかなり私の解釈を交えて申し上げているが、そういうところは国の方でも、今議論がされているところと捉まえている。要するに、これまで通り一遍のペーパーテストでどうかとかではない段階が、ずっと言われ続けてきているが、本当に直面している段階にあるんだということが、今次の学習指導要領改訂の議論の大きなところであるということを考えている。

そういう意味では、川田委員から頂いた、子どもたちがそれぞれ関心のあるところを、もっと掘って行って、そこが自分たちの学びの意欲に結びついていくような指導のあり方が求められるというのは、おっしゃる通りだと感じている。調査の取り方については、国の全国学力・学習状況調査がこういう言い方をしているため、なかなか難しいところもあるが、子どもたちの学びの意欲と探究と教科というものが連関していくというのをどう図っていくのかというところは、全国的に大きな課題になってくるだろうと思うし、そこは十分認識をしながら取り組んでいきたいと考えている。

(高橋小中学校課長)

今、三木課長も言っていたが、生涯学び続けていくという姿勢が非常に大事なことだと思っている。探究的な学びというのが、次期学習指導要領の改訂の中でも、1つのポイントになっているため、そういったところを総合的につけていくということが、この先大事になっていくと思っている。指標の話は、三木課長からもあったが、そこは全国の学力調査の中の1つの項目となっている。そこは、また踏まえていくということになると思うが、それだけで全てを評価していくということではないと考えていきたい。

(岡谷議長)

私から質問させていただく。

MIMはステージを分けている。つまり、つまずきの分析をステージ化して、それに基づいて指導しているということである。一方、県の課題として、資料4の2ページに「自律的に学習が進められるよう、学習データを活用した児童生徒のつまずきの把握や分析が必要」と記載されている。では、それをどのような具体的な取組としてつなげていくという視点で見ると、3ページには記載がない。

MIMはレベルに応じた学習のモデルがあり、それを先生方が、家庭も巻き込んで、丁寧に細やかにやっていこうとされている。それをちょっと県の方に教えてあげてもらっていいでしょうか。

(原委員)

やっぱり大事なのは、3rdステージの子どもを上げていくことだと思っている。2ndステージの子どもが1stステージに上がる、3rdステージの子どもが2ndステージに上がることを私はねらっている。少しずつでも点数が上がっていく中で、学力はついていくのではないかと仮定している。アセスメントすることで子どもの実態がわかり、どの子に声をかけたらいいのか等、県教委でもやっているが、発達障害の子どもたちへの支援と同じような形、ユニバーサルデザインの視点を大事

にしていく授業というのが必要だと思う。どの子どもが、どのステージにいるかで、支援方法は変わっていくため、個々の子どもの実態が分かるということを大事にしていかななくてはならないということ、1年間やってみてとても思った。

(三木教育政策課長)

委員長がおっしゃったとおり、アセスメントをしっかりと、子どもたちの状況を捉まえて指導していくということは、当然重要なところである。例えば、県では学力定着状況調査をやっているが、これを今年度からコンピュータベースで調査を行うことにしている。この調査は、子どもたちの定着状況をまず把握して、その学年中に、身につけるべきことをしっかりと身につけるための指導のために、調査をしてアセスメントするものである。ここでつまづいているだとか、ここがまだ定着してないだとかというところを見極めて、先生方の指導に使えるように、やっているものである。これをデジタル化することで、即座に採点し、子どもたちがどこにつまづいているかとかという結果がすぐ返せるようになる。これまでは何か月かかっていたが、それがすぐ返るようになるというのは、子どもたちの状況をつぶさに把握して、先生方の指導に活かせるようになり、また他にも子どもたちの学習状況をダッシュボード化するという取組もしており、そういったものを使いながら、指導していくことを考えている。

(原委員)

成績が低い子どもと高い子どもは分かれると思う。低い子どもに対して何の指導をするのかというところが明確でないと、担任の先生はどうしたらいいのか分からないと思っている。梶原はこの読みに特化し、まず読みの力を見ていくということだからやりやすいと思っている。読むことが難しい子どもに対して何をするのかという具体的な支援がMIMにはある。成績が低いことだけが分かっても担任は支援方法を見つけるのが難しいのではないかと思う。

(高橋小中学校課長)

三木課長からもあったが、やはりデジタルの強みはあると考えている。各学校がそれぞれの良さを生かしながら、個別の学習支援に活かしているという意味で、例えば読みが苦手な子どもたちへのMIMの活用というのは、非常に効果的だということは理解できる。そういったいいところも取り入れながら、ダッシュボードなどのデジタルの活用も並行しながら、学力の向上、定着に向けて取組を進めていきたいと思っている。

デジタルドリルのAI活用では、個々に応じたレベルで問題等を返してくれて、それを取り組んでいくことができるようになっており、そういったところも進めていきたいと思っている。

(岡谷議長)

学力向上はこれぐらいにさせていただく。もし何か言いたいことがあれば、最後に言っていだけ思う。

続いて、「地域への理解と愛着を育むキャリア教育の推進」に関して、何かご意見、ご質問のある委員はいかがか。

(佐竹委員)

進路に対しては、保護者の意見はとても多く反映されると思っている。私は、高校のPTA連合会の会長だが、高校入学、または高校卒業してからの大学や就職、専門学校などの選択というのは、親が一番身近にいるため、親の影響もすごく強くなっていると思う。

また、親育ちというか、親も勉強し、今何が求められているのか、今から何が必要なのか、ということを経験も勉強して、子どもたちに伝えるということも大事だとは思っている。

(岡谷議長)

方向性2の①「PTAと連携したキャリア教育の推進」として、地域で働いて活躍している人と対話をする機会を創出するという事業にアドバイスはあるか。

(佐竹委員)

私は幡多地域から来ているが、学校の同窓生OBで起業されている方や社長などが、出前事業に来て、最先端のICTの機械を使って学びをしていることなどを教えてくださり、それで子どもたちも、郷土愛というか、地域の方も勉強してやっているんだと、地域とのつながりを感じて、それはとても大事だと思っている。

やや話が飛ぶかもしれないが、最近すごく高校生が絡む事件、昨日もある野球の監督が逮捕される事件があり、全員高校生とか18歳ぐらいだと思う。学校と家庭はつながって、子どもたちがいるが、第3の居場所というか、寄り添うところや相談先など、それが今すごくこの世の中に欠けているのではないだろうか。

今日の報道もありましたが、ChatGPTとかに聞くというのが正解かどうかというのも、小学校、中学校、高校なりに今から学び、どれが正解なのかを見出せる学びも大切だろうと思うし、先ほど言った第3の居場所というか、そういう頼れるところが今なくなっているため、何かうまく地域の方々とつなげる仕組みやそういう勉強や学びができたらとは思っている。

(中島委員)

今の子は、私たちの頃と違い、友達同士の情報を親とか先生とかに知られないようにするという傾向がものすごく強くなっているような気がする。私は割と若い子と話をする機会があるが、高校生ぐらいになると、親には本当のことは言わないし、文句を言われそうなことはとにかく言わなくなるように思う。ちょっと悪いことをしてしまうような傾向がある子どもでも、親の前ではものすごくいい友達とめぐり合っているみたいな姿を見せる。だから、昔と違い、本当の姿を見ろというのは親にしても先生にしても、ものすごく難しくなっていて、本当にどうなるのだろうと思うことがある。親に嘘や先生に嘘をついてでも、そういう友達のことをものすごく大事にしている。自分の心を満足させられていないとか、自分が将来にどうもほっこりしないとか、何かきっかけになったものがあつたのだろうかわからないところがあるが、そういう子が増えているような気がする。

今は親に見せる姿、先生に見せる姿、友達と一緒にいる時の姿っていうのが、私たちの頃からいっても想像ができなくなっている。これをどう修正していくかというのを私もいろいろ考えてみるのだが、仲良くなろうと歩み寄ると失敗するケースもあるし、叱るとすごく真剣に後悔する子もいる。

私たちの頃と比べると、子どもの置かれている環境と育ち方がもの難しくなっていて、親御さんとか先生だけにお任せするっていうのは、難しいのではないかなと思う。とても素直な部分もあり、悪い

と思っていながら、やってしまっている自分を好きではないとはっきり言う子もいる。そういう気持ちがあるうちに、何とか私も協力できないかと思うが、複雑でなかなか難しい。

勉強も、その子たちに聞くと、小学校の低学年から塾に通っていて、塾の友達は友達じゃないって言う。受験のため、親を安心させるために行っていて、ある友達と一緒にいると親が非常に不機嫌になり、「あんな子と一緒にいてはいけないよ」と言われる子どももいるらしい。その子は、親が不機嫌になる子どもといると、気が抜けるって言っている。だから、今の子どもは、とても複雑な心理状況の中にいると思う。友達と言いながら、実は友達ではない人と仲良くし、どうやったらトラブルがなく過ごせるか、などのような心理になっているような気がしている。私もとても悩んでおり、目をつぶってはいられないと思っている。

(岡谷議長)

こちらの大人の方が、これがよかれと思って語っても分かったふりをして通じないため、そこは伝え方をもっと工夫する必要があるのではないかとされているような気がするのだが。

これについてはいかがか。

(三木教育政策課長)

まさに今、中島委員からおっしゃっていただいたように、社会情勢が変わってきて、1例を挙げれば、ネット社会が広がり、スマホを開けばSNSなど一見キラキラしているように見える世界が目の前にあり、それをいつでも見られて、実は近いのか、遠いのか何だか分からないような関係がそこにあったり、それは大人の社会も、もしかしたら似ていたりするのかもしれないが、どんどん分断が進んできているというのは、もう言われて久しいかと思う。

そういう中で、いわゆる孤立化がどんどん進み、かつてあったような物理的なつながりというところから離れてきてしまっているところがあるのではないかというのは、重ね重ね言われているところであるとも思う。

そういう中で、総論的な答えで大変恐縮だが、子どもたちの変わらないところも絶対あるだろうと感じている。それはいつの時代であっても、若い世代であるからこそ、変わらないものがあるだろうと思っている。カッコいいものには惹かれるだろうということがあるので、子どもたちは本当にかっこいいと思えば、それは心からそこについていくことがあるだろうと思う。

我々もキャリア教育をやるときに、行政の立場で言いづらいところもあるが、あまりこう押し付けると言うようなことではなく、子どもたちが心から「これって、カッコいいな」とか、「これって、ええやん」と思ってもらえるような仕掛け、例えば地域で本気で活躍している大人のカッコいい生の姿を見てもらったりとか、生の話を聞いてもらったりする、とかそういうこともあると思う。

それから、子どもたちの同じ世代同士で結びつきを作ってもらおうという意味では、昨年からやっている高校生の宿泊研修。県の課題がこういうふうになり、それを解決できるか、というような話で課題を与えるのだが、それを解決してもらうための議論を深夜までやっていた。そういう真剣さがある子どもたちが他の同世代の子どもたちを見て、いい方に影響されていくということあると思う。

それは、多分いつの世界でも変わらないのではないかと思う。中島委員からのご指摘は、教育委員会だけで抱えられることではないかもしれないが、社会全体の変化の中で、子どもたちに対してどういうふうなことを伝えるのが一番よく伝わるのかというのは、教壇に立っている先生方、子どもたちに向き合っているプロがいらっしゃるので、生の声も聞いていただきながら、本当の意味でどういう

することが一番子どもたちに響くのか、というところは常に突き詰めて考えなければいけないということは認識をしている。

(川村委員)

学力向上にも引っかかるが、キャリア教育はこれに連動していないといけないと思う。キャリア教育で世の中を見る、企業を見る、世界を見るというところから、「私ここに行きたいから、もっと勉強しなきゃ」っていうふうに戻していくようなカリキュラム設計や、先生のアドバイスやご指導みたいなことが連動してないとまず駄目だと思う。前にも話したのだが、高知の企業がすべて今モデルになるかというと厳しくて、これだけ世の中の変化が激しいと、皆さん悩んでいるし、「どうしよう、経営はこの先いけるんだろうか」という、その悩み自体を子どもに伝えてもらいながら、一緒に考えること。そのためには、自分はどういう力をつけて、地域の力の一端を背負うんだというようなもっていき方をしないと、なかなかうまくその両方が連動していかないと思うが、残念ながらそれがほとんどできていない。誰か講師を呼んで1時間話をする、子どもはほとんど寝ている、レポート書いて感想を書いて終わり、これはではほとんど活きない。

もう1つ残念なのは、適当なところに修学旅行に行っている。雪が降らないところなので、スキーの経験っていうのも大事だが、大人になってから行こうと思ったら行ける。そうではなくて、学生だからこそ見て欲しいものが世の中にはたくさんあるが、新しいところを探していくのは、先生がめんどくさがったり、いろんな事件、事故もあったので、そこに臆病になったりというところもあるかと思う。安心安全なことはちゃんと確認をした上で、そこと日ごろの教育が連動していくことがまず必要だろうなと思う。

ここは、学力向上にも引っかかるが、先生ご自身のアップデートが常に必要だ。座学で知識を学びましょう、ではない。それこそ課題を解決していく、先生方の力を磨くということが常にないといけない。これは先生だけではなくて、世の中のどの業界でも、それを今ものすごくやっている。リカレント教育としてすごくやりましょう、となっているわけなので、ここもちゃんと連動して考えていただきたいなと思う。

進路でいくと、私も高校生と直接面談をすることは結構あるが、奨学金のことを知らない子どもたち、親御さんがたくさんいる。これだけ情報が世の中に出ており、検索したらすぐ出るものだと思うが、そこに行き着いてない親御さんや子どもがたくさんいる。返さなくていい奨学金がこれだけあるよって言ったら、知らなかったっていう親御さん、子どもさんが結構多い。間に合わなくなっている場合もあるため、大分早い時点でちゃんとこの情報が行き渡るようにすることと、私はものすごく驚いたのだが、修学旅行に行かない子どもが結構いて、びっくりした。なぜかという、お金がない、親が行かせない、必要がないっていうのだが、どうもお金の問題。それから、思いっきり学ばせたいと思っても、去年から費用がものすごくいろんな金額が上がっていて、体験施設に行けなくなりつつある。修学旅行は、普段は親御さんがなかなか連れて行けない子どもであっても、普段接することができないものに接することができる機会。この辺りにぜひ力も入れていただいて、学力向上とそのキャリア教育がちゃんと絡み合いながら、相乗効果を出すような仕組みということも検討いただければなと思う。

(岡谷議長)

修学旅行にどのぐらい行けてないかわかるか。

(麻植高等学校課長)

修学旅行に行っていない数は、とってないのが現状だが、実際に行っていない生徒がいるということは把握している。おっしゃっていただいたように、多分金銭的な面が大きいのかなと思う。あとは、生徒間のトラブルで行きたがらない生徒の中にはいるということも把握はしている。

(岡谷議長)

奨学金等の就学援助の状況はどうか。

(三木教育政策課長)

修学旅行のことに少し関わるが、やはり最終的にはその保護者の同意を取って行かせているというところで、義務については、コロナ禍以前はあったが、現在は特にそういうことがないであろうと把握はしている。金銭的に厳しい家庭に対しては、就学援助等があり、義務については、ほぼ行っているのではないかと考えている。

それと、最初に話があったキャリア教育と学力のことに關しては、委員がおっしゃられたように、やはり密接に関連しているものと考えている。一昨日、庁内で就学前から高等学校まで通したキャリア教育について、しっかり体系的に取り組んでいくということで、プロジェクトチームを立ち上げたところである。出口である高等学校、2040年のグランドデザインにもあるような高等教育に向けて、就学前からどのように取り組んでいくのか、入口と出口と両側からしっかり議論していきたいと考えているところである。あわせて、教員のアップデートというのもおっしゃる通りである。先ほど少し触れさせていただいたが、教員に対して、企業の課題や本県の課題とかをしっかりと学んでいただき、それを子どもたちに還元していくことは、非常に大事なことであるので、そういう研修の機会等も設けていくようにも考えている。また、今年度については、小学校、中学校、高等学校のキャリア教育の担当者が一堂に会し、どのような学びを連続して行っているのか、キャリアパスポートをどのようにつないでいるのか確認する機会等も設けていきたいと考えている。

(岡谷議長)

次に「重層的な支援体制の整備・強化によるいじめ防止・不登校対策の推進」について、ご意見を賜ればと思うが、いかがか。

(西内委員)

すいません2点教えていただきたい。

資料3を見ていただき、先ほど三木課長から説明があったように新規の不登校者数は減っているということだったが、その下のNo.54のエリア配置型スクールカウンセラー（以下「SC」）ということで、困難事例にも対応する組織の対応への体制を作るということだが、もう少し具体的にどういう意図で広域的な関わりが必要になってきているのか、まず教えていただきたい。

(吉村人権教育・児童生徒課長)

まず、現在行われている核となるSC、エリア配置型のカウンセラーについて説明する。このエリア配置型のカウンセラーというのは、県内、中部、東部、西部、4ブロックに分けて、それぞれ1名ずつ

常勤的に配置している。各学校配置の SC と連携しながら支援に携わるという役割である。スーパーバイザーからスーパーバイズを受けるには、日程調整等が必要である。そういったときに、この核となる SC が近隣にいたので、若手の SC や経験の浅い SC に助言するような役割も担っている。もしくは、少し対応困難な場合には、複数でその支援に当たったり、未然防止に関わって、子どもたち全員面接のときには、複数に関わり面接を行ったりする形もとれるようにしている。

なお、スクールソーシャルワーカー（以下「SSW」）につきましては、それに似た形のチーフ SSW が近隣にあり、相談とか、スーパービジョンの方に関わるような形をとっている。

（西内委員）

学力向上のところの課題がもともとあり、不登校になっている場合もあるだろうが、家庭が困窮世帯であるとか、保護者に精神疾患があるとかというようなことで不登校になっている場合、ヤングケアラーとかも入ってくるが、そういうように非常に多様化しており、アセスメントというか、SC も SSW も先生方も、家庭訪問してみないとわからないとか、SC さんが面談してみないとわからないということが非常にあると思う。

昨日、私が SSW の初任者研修をやって、終わった後に人権教育・児童生徒課の方々とともに課題を共有していたところ、初任の SSW たちから、なかなか学校に入りづらい学校があるという話があった。もちろん連携ができていて、入っていきやすいところもあるということだった。人権教育・児童生徒課、他の課でも構わないが、学校間の差とか、あるいは連携をしていくにあたって、どんな課題があるのか。横の繋がりを強化していくというか、形式的に組織だけつながったというのは不十分で、人が変わっても継続ができるように、1対1の専門職同士や保護者との関わりはきめ細かくやっていく必要があると思うが、その辺について、各市町村回られた時や県立学校から声を聞いているのかについて少し教えていただきたい。

（吉村人権教育・児童生徒課長）

西内委員がおっしゃったように、本当に複雑化・多様化した背景や要因が垣間見られるのが、こういった重層的な支援の場面である。中島委員や川村委員の方からもあった奨学金のこと、家計の困窮のこと、非行系の児童生徒のこと。そういったことに、個別支援として、前段の義務の段階で話が出ていたような、授業という集団指導の場面の中に、こういった個別的な配慮や支援を含みながら進めるかなど、重層的な支援体制の整備強化の部分っていうのは、本当に個々の子ども、家庭の状況などをきちんとアセスメントしたうえで、やっていかなければならないと思っている。

質問にあったように、学校間によって、多少課題があるというのは私たちも把握している。そこで、本年度から夏に行うチーム学校の研修の体制を少し強化した。学校のコーディネーター教員、SC、SSW、市町村教育委員会の担当者を一堂に集め、グループ協議を行う計画である。個々で対応するのは非常に困難な時代になってくると思われるため、できる限り組織的な取組が充実されるように、今年は取組を少し強化しようと思っている。

（岡谷議長）

学校に入りにくいのはなぜか、どこに課題があるかとか、学校間で連携しづらいのはなぜか、どこに課題があるか、ということについてはいかがか。具体的に教えて欲しいということではないかと思うのだが。

(吉村人権教育・児童生徒課長)

専門家である SC、SSW だが、学校に入りづらさを感じる場合、どうしても個業になってしまっている場合がある。支援会に配置日の調整ができなかったとか、支援会の情報が共有されてなかったとかは耳にしている。そこにあたっては、新たな対処方法を学校の方にも伝えている。

今回西内委員の方からあった、昨日の初任者研修での内容のことは、初任者の SSW の方には再度こういう対応したらいいよ、ということを伝えていかなければならないと思っている。個々の学校の差というのは、その仕組みや、個人の要素の部分もあり、一概にいうことがなかなか申し上げにくいところである。

(西内委員)

何年か前に、人権教育・児童生徒課から、各学校に「支援会に SC、SSW を参加させてください」という文書を送っていただいたことがあり、その時は、すぐによくなったというか、参加しやすくなったという声を私も聞いた。初任者研修だったため、1 年目で訳も分からずやっているところもあると思うが、つながりにくいというところで課題を抱えてしまうと、どうつなげようっていうところまでいなくなり、今言っているのかとか、言わないでおこうとかという思量をしないといけなくなる。そのあたり、県教委の方として、SC や SSW が働きやすいというか、こうちティーンズベースとか、学びの多様化学校で説明があったように、児童生徒から見て、学校以外にも行き場所があるというような発想を変えられるような取組もされているので、自分の学校だけで問題を解決するわけではない、むしろしなくてもいいと言うか、特に家庭の問題、困窮世帯とか精神疾患のある家庭の場合だと、先生や学校だけでは難しいため、福祉課とか保健センターと連携することが必要になってくる。ぜひその問題を他の職種と共有できるような体制、私もスーパーバイザーとして、尽力したいと思うので、引き続きよろしく願います。

(原委員)

校内サポートルームの設置率について、全国値と比較して低い状況であるというが、令和 7 年度から比べて、令和 8 年度の 4 月からは、県では増加しているのかということと、そのサポートルームに入る教員はどういう方が入っているのか、学習支援が多いのか、子どもたちが来て楽しむ設定が多いのかを教えていただきたい。

(吉村人権教育・児童生徒課長)

現在、文部科学省に新規で 11 校をあげている。ただ、各学校の不登校の児童生徒の状況もあるため、毎年この数が継続されるということではない。その都度状況を把握しながら、新たに県教委が関わりながら設置しているものについては拡充し、11 校増加ということである。

そこに携わる者だが、文部科学省の補助金を活用している場合は、支援員である。それとは別に、県はこれまで校内サポートルームの充実に向けた事業で加配教員を配置してきた。その事業では、こういったモデルが必要かということについて教員を入れて実施してきた経緯があり、その場合の多くは支援員が関わるものが多いと思う。

内容については、学校の状況と通っている子どもたちの状況によって、学習を望む子どもには、学びの提供をしている学校もあるし、そもそも家からなかなか出られないという子どもの場合や学校に

は来られているが、学級に入りづらい子どもの場合、また県が行っているメタバースには来ていたけれど、少し前を向き始めたので、学校で接点となる居場所という場合など、本当に多種多様な使われ方をしているのが現状だと捉えている。

(原委員)

学校の中でオンライン授業をしている学校はあるのか。

(吉村人権教育・児童生徒課長)

サポートルームを活用してオンライン授業を受けているケースは把握しており、小・中、高等学校などでもオンライン授業については報告を聞いている。

(原委員)

メタバースからリアルな空間に出てきたっていう子どもがいるというのはとても喜ばしいことだと思った。今後も、充実していただければと思う。

(佐竹委員)

県立高校のことだが、この教育振興基本計画の方針と、先日報道された高等学校教育改革促進事業の計画内容について、保護者間で大きな懸念が生じており、代表して質問させていただく。

資料4、9ページ下段の方向性4、国の基本方針グランドデザインと書かれたところであろうかと思う。教育振興基本計画には、重要な方針として、地域間格差の解消が挙げられているが、今回の計画を拝見すると、高知県の中心部に拠点校を4校配置するとなっている。3年間で上限62億円が支給され、これでは中心部と中山間地域の格差をさらに助長し、計画の基本理念と逆行してしまうのではないかと深く懸念している。

高知県の子どもたちは、どこの地域に住んでいても平等な教育を受ける権利を有している。住む地域によって学びの機会が制限されることは、県立高校が果たすべき本来の役割や、教育の公平性から逸脱していると思われる。また、先ほど提示された資料1の下段の方にもあるが、中産間地域の小規模校における地元中学校からの入学や入学者数の割合は、C評価にもなっており、目標値に達していない。

このような状況下で、本事業が実行されれば、中産間地域の魅力低下に拍車がかかり、過疎化や生徒数の減少がさらに悪化することが強く懸念される。

ついては、基本計画の理念、今回の事業内容の整合性について、教育委員会の明確な見解をご教示いただくようお願いする。

(中島高等学校振興課長)

国の基本方針グランドデザインを踏まえた高校教育改革の推進についてお答えさせていただく。

今回4校を拠点校として申請させていただいたが、そもそもこの国のグランドデザインというのは、2040年の各地域、高知県の姿を捉まえて、どういった取組をしていくのかを考える事業になっている。

本県は1次産業の振興、アニメプロジェクトなど、産学官で進める明確な実行計画成長戦略も持ちながら、この2040年の高知県の高校の姿を考える必要があるということで、子どもたちが将来高知県

でどう生きていくのかということを描けない現状もあると思うが、そういった現状も打破するために、本県においては単なる延命措置ではない、新しい教育システムそのものを抜本的な構造転換を断行して、子どもたちに劇的な変化、それから具体的な行動変容を起こすために、4拠点でモデルケースをつくり、それを県下の学校に広げるということで、横のネットワークを網羅する構造改革を推進していきたいと考えている。従って、郡部の学校等、県下のこの4校以外の学校を、言い方が悪いが、置き去りにするとかそういったことは全く考えておらず、まずはこのモデル校で考えたこの取組を県下の他の学校にも普及展開し、高知県の産業界、高知県を支えていく人材を高知県みんなで育てていくんだという、そういう理念のもとにこの申請をさせていただいている状況である。

(佐竹委員)

やはり資料1のC評価、中山間の小規模校、地元中学校入学者の割合というのは、これをやってしまえば、無視してしまうという話だと思う。地域間格差は必ず起こる。4校だけ定員数がオーバーして、郡部の子たちも高度な学びを追って、地域から出ていってしまう。各中山間には小さい学校がある。高校というのは、学び、教育の最終学部であり、そこから人を取られてしまえば、なくなってしまう。地域の教育も下がってしまう。そこをすごく懸念している。これを参考にと言うが、やってしまえば、すでにもう地域の子どもたちはいなくなっているため、同時進行なり、参考にしないぐらい一緒に並行していくような手立てをしないと、平等な学びにならない。それに、高度な技術を配信して見るのもあるが、それではそこで繰り広げられる間（ま）であったり、高度な技術を目の前にしたりするのは、違うものになると思うので、それは平等な学びとはかけ離れていると僕は思っている。

(岡谷議長)

ここでは、振興基本計画の具体的な施策についての進捗状況をチェックするところですので、この件については、多分もっと大きなところで話さなければならないんじゃないかなと思う。大綱の部分や教育委員会内で話をさせていただくというのが、非常に重要なのではないかなと思うので、その要望を教育委員会の方にあげていただければと思う。

(宮本委員)

今回は、大きな目標のところ、体育、体力っていうところが出てこなかったのも、話をしているのか迷ったが、継続的に体力は一定水準、全国平均は上回っているが、細かく表を見ていくと、やはり中学生の男子、女子ともに、非常に数値が低くなっている。さらに、卒業後に運動、スポーツをしますか、という数値も非常に低い。それらは、実は先ほどから話になっている授業外の学びにも通じるところがあるのだろうと思う。数値だけで言うと、体力を高めるために、学力を高めるために、というような話なのだろうが、そのために大元の授業の中で、子どもたちが、学ぶことが楽しいという授業がどのくらいされているのか、学力を高めるためならしっかりトレーニングすればいいし、体力を高めるだけだったらトレーニングすればいい。だがそれでは、面白みがないから授業以外のところで学びが続かない。

それは、キャリアのところにもつながり、面白いからこれを仕事にしたいので、学びをやりたいというようなところの大元、いわゆる学ぶ楽しさとか運動する楽しさというのは、日々先生方が行われている授業の細かな精査っていうのが必要になってくるのではないかと、話を聞きながらすごく感じ

たところである。

そういう意味では、私も小学校等の授業によく行かせていただくが、先生方が特にここで言うD、E層の子どもに向かって授業を進めている。A、B層の子たちも、D層の子たちと一緒に学ぶ楽しさを授業の中で味わっているからこそ、みんなで楽しめる。そうするとD層の子どもも動きが楽しい、学びが楽しいというところにつながるんじゃないかと感じている。

それが中学校、高校になると、スポーツができないと評価しない。だから、できないからやらないという悪循環、負のスパイラルみたいなのところに対してのアプローチというのがどのぐらいされているのかというのは、この指標では出てこないの、そのあたりを教えていただければと思う。

(山崎保健体育課長)

授業の中の楽しさとかというのは、できる、できないということも含めて、将来にわたって、運動が好きと思える児童生徒を育てていくことが大変重要であると考えている。

令和7年度の体力調査の結果については、こういう形で出ているが、引き続き授業の中での体を動かすことの重要性とか、楽しさというところを小学校、中学校、高等学校で継続するよう、体育主任会や学校訪問させていただき、先生方にそういった指導等も伝えていきたいと考えている。

最終的には生涯にわたって運動する、スポーツをする者を育てるところが重要なところだと思うので、学校やその他の教育活動を通じて、そういったところを育てていきたいと考えている。

(宮本委員)

日々、先生方に対して、指導しているところはあると思うが、普段から考えているのが、スポーツ活動や運動活動が他教科につながるというようなところも、子どもたちにも理解してもらいたいし、先生方にも理解していただきたい。いわゆる体力がなければ、受験勉強も含めてできないので、その辺りも合わせて、先生方への指導、施策等をお願いできればと思う。

(宮崎委員)

川田委員や宮本委員さんがおっしゃっていた楽しいという言葉は、意欲というところで幼児教育では、とてもつながる。キャリア教育の中で幼稚園、保育所といえ、ものすごく先の話かなと思うが、保育所、幼稚園からやりましょうというのは、ただどこかの職場に行くとか、そういう意味ではないと捉えた。今、自らいろいろなことに取り組むことの価値について言われてきており、なかなか数値化ができていくことはあるが、資料4のところでは考えたら、個別最適で協働的な学びのところや小学校との連携というところでの成果が現れてきた。1つだけ具体的に言うと、小学校の先生が5歳児の保育を見たときに、すごく率直なご意見を言うてくださる。小学校では、教師が話して、それに伴って子どもたちが動くという形が主、でも保育所では、子どもたちが自分のしたいことをしながらも、体験を通して学んでいる姿が印象的だった。その中で、いろいろな言葉や数量などを学んでいく保育所の環境構成、環境を通しての教育と言われるが、私は最近小学校の先生たちが、幼児教育に興味や関心をすごく抱いてくださるようになったことが一番ありがたいことだ。では、保育所、幼稚園の職員は何を求められているかという、何度も皆さんがおっしゃっているが、生きにくい時代を子どもたちがこれから生きていくために、そういうことを大事にする教育が続け、つなぐということが大事と思う。

梶原町の取組は、読んでいて「うん、うん」とうなずくところで、すごく共通するところがあるの

ではないかと、勉強させていただいた。

(竹内委員)

いじめ防止・不登校対策だが、いじめ防止と不登校対策と並列で考えておっていいのか、と思っている。と言うのは、いじめ防止については、新たなステージに来ているのではないかという思いをしている。単なるこれまでの生徒指導上の1分野とか、従来型の生徒指導対応ではなくて、これは、いわば学校経営上の課題になってきているのではないかと。単なる教育的な配慮だけではなくて、危機管理とか、組織的なガバナンスとか、説明責任とか、そういったところへの対応をしていかなければならない、いわば実務としてのいじめ対応力というのが必要になってきているので、この施策と実態が、実際は合っていないのではないかという思いを少し感じていたところである。

(三木教育政策課長)

厳しいご指摘だと思うが、おっしゃるとおりで、昨年大きな話題になったが、暴行の動画がSNS上で大いに拡散したのは記憶に新しいかと思う。それを受け、文部科学省からも新しく通知等々が出てきており、もちろん子どもの安全が一番で、被害を受けている子どもの安全をいかに守っていくかというのは、第一である。しかしながら、一方で加配側の生徒を撮影した動画がSNSに流出となった場合に、この子どもの問題はどうか、あるいは学校の名前が出て、その後いろいろ殺到することがなどを考えるときに、まさに竹内副議長がおっしゃった通り、子どもの安全という一番大事なものは軸に置きつつも、そこだけにとどまらない問題が今日において出てきているということは、まさにご指摘の通りだと思う。今回の整理では、生徒指導の部分に着目をした分類になっているが、そこだけにとどまらない課題に今日なりつつある、あるいはもうなっているということは、十分認識をして、取り組んで参りたいと考えている。

(岡谷議長)

本日頂いた意見については、事務局で取りまとめて、施策に反映していただければと思う。
それでは事務局にお返しする。